

令和3年度 奈良市立西大寺北幼稚園 研究実践概要

園長名 大西 育代

全園児数 29名

1. 研究主題

心を動かし主体的に活動する子どもの育成

～自ら考え遊びを生み出す環境構成や援助の在り方～

2. 研究年度

初年度

3. 研究主題設定理由

幼児教育は幼児期の特性を踏まえ、環境を通して行うものであることを基本としている。子どもはワクワクドキドキして思わずやってみたくなるような環境があるからこそ繰り返し取り組む中で試したり、自分なりに考えたり、友達の刺激を受けたりして育っていく。子どもが自らを取り巻く環境に主体的に関わる中で、自分の実現したい思いがより確かなものとなり、子ども自ら遊びを生み出していけるよう、保育者の環境構成や援助の仕方について探っていきたいと考え、主題を設定した。

4. 具体的な研究内容

①研究のねらい

- 子どもが主体的に身近な環境に関わり、興味や関心を深めながら「おもしろい」「もっとやってみたい」と感じ、自ら遊びを生み出していけるような環境構成の工夫や援助の仕方を学ぶ。

②研究の重点

- 研究主題について共通理解を図りながら遊びの中の学びについて考える。
- 各期の事例を持ち寄り、子どもが自ら動き出すための援助や環境構成について追求する。
- 子どもがおもしろさを感じ、「もっとやってみたい」と自ら環境に関わり、夢中になって遊び込む環境づくりを工夫する。
- 保護者や地域と連携を深め、保育内容の充実に努める。

③活動の方法

_____環境構成 _____保育者の援助_____主体的に関わっている姿

【事例1 4歳児 「転がしコース」 11月】

- <ねらい> ○友達と思いや考えを出し合いながら遊びを楽しむ。
○いろいろな素材を転がしながら、友達と一緒に転がし遊びのコースづくりを楽しむ。

・友達が遊んでいた転がし遊びがやりたいと、A児とB児とC児が転がしの素材が入っているワゴンを持ってすべり台にトイを立てかけて転がしコースをつくっている。B児がゴルフボールを転がしてみると、転がるスピードが速くゴールまで転がらず、途中でトイから落ちてしまう。C児もゴルフボールを転がすと落ちてしまい「落ちちゃった」と話すとB児「何で途中で落ちるん？」と話しながらゴルフボールを何回も転がしている。「ほんとだね。落ちちゃうね。何でだろうね」と一緒に遊んでいる友達にも声をかける。何度も転がしているとA児が「分かった。トイとトイのつなぎ目の所で跳ねるんや」と話している。「そうなの？見せて欲しいな」と他の子ども達にも気付けるように声をかけるとA児「分かった。みんな見ててね」とピンポン玉を転がすとはねてトイから落ちてしまった。それを見てB児とC児が「ほんまや、跳ねてる」と話す。するとB児が「壁があったら落ちひんのに」と話すとA児が「これなら壁にならないかな」とワゴンに敷いていた画板を持ってくる。A児のアイデアを聞いてB児が「いいやん。早くつけよう」と洗濯ばさみを取りに行きみんなで跳ねる場所に画板で壁をつくった。「これで転がるはず」とB児がゴルフボールを転がすとトイからボールが落ちることなくゴールまで転がり、「行けた」と3人で喜んでいる。「落ちないでゴールまで行けたね」と幼児と喜びの気持ちに共感する。しかしA児がピンポン玉を転がすと途中で止まってしまう。A児が「ゴールまでいかないんだけど」と話すとB児が「ゴルフボールの方が重たいからこっちの方がよく転がるよ」とA児にゴルフボールを渡す。その話を聞いてA児「そうなんだ」ともらったゴルフボールをもう一度転がすと今度はゴールまで転がっていき「転がった」と3人で喜んでいる。

<考察>

- ・遊んでいる中で、思いを聞けるように周りに声をかけたり、実際に見せる場を設けたりしたことで、思ったことを自分なりに表現したり話したり、友達の思いを聞いたりすることに繋がった。
- ・いろいろな素材を使って何度も転がし遊びをする中で、大きさや重さなどで転がる速さが違うことを知り、そのことを友達に教えたりする姿に繋がったり、コースの長さや角度などを友達と一緒に考えたり話したりしながらつくる姿に繋がった。

【事例2 5歳児 「きれいなプールもつくりよう！」 7月】

<ねらい> ○友達の思いを聞いたり、自分の思いを伝えたりしながらイメージを合わせる。
○砂、土、泥、水の感触を味わいながら遊ぶ。

・園庭で泥団子をつくったり、砂場に穴を掘り、泥の感触を楽しんだりしている。しばらくして、水を出すと穴の中に水が溜まり、「入ったら気持ちいい」と数人で入っている。「一緒に入ろうよ、楽しいし気持ちいいよ」と声を掛けるが「汚れるのが嫌だ」と動こうとしない。その様子を見て「じゃあきれいなプールをつくりよう」「それやったらみんなが入れるんちがう？つくりよう！」と嬉しそうに話し、「何でつくる？」「ここに水を入れたら泥んこのまやしな」「たらいは？」「プールがあったらいいのに」とそれぞれが提案する。色々なものの中からブルーシートを見ると「これいいな」とブルーシートをみんなで広げ、水を入れる。しばらく水を入れていたが平らなのでどんどん水がこぼれてしまう様子を見て「ここになんか置くものがある」とブルーシートの周りを指さすと「椅子は？」といつも使っている椅子を取りに行く。ブルーシートの周りを椅子で囲い水を入れるが、椅子が足りなくて周りを全部囲うことができず水が漏れだしてしまう様子を見ると「大きい椅子も持ってこよう。誰か手伝って」と話し数人で椅子を取りに行く。周りを囲い水がたくさん溜まってくると「本物のプールや」と楽しそうに遊びだす。なかなか入れなかった子どもも嬉しそうにプールの中に入り遊んでいる。しばらくすると、水の重みでブルーシートが椅子から滑り落ち、再び水が漏れだすと「ここにバケツを置いたらいいよ」と周りに伝え、椅子の上にブルーシート

をかぶせ、バケツを置くが、ビニールシートは滑り落ちてしまう。「ここに水入れたら重くなるよね」「それいいね。そうしよう」とバケツに水を入れる人、バケツを取りに行く人など分担してつくり始める。遊んでいるうちに周りに水が溜まってくると「たらいで足を洗ってから入らないとまた泥んこプールになってしまう」とプールの前にたらいを用意し、「ここも掘ったら泥んこプールになるよ」とが掘り始めるとみんなで一緒になって掘っている。「先生も一緒に入ろう！ここはあったかいで。」と話していたので保育者が「なんでここはあたたかいの？」と尋ねると「だってお日様が当たってるもん」と温度の違いを感じながら入っている。泥んこで汚れるのが嫌だと話していた子どもも遊んでいるうちに自然と泥んこの中に入り「ここ足湯にしよう」と嬉しそうにしながら「やってみたら楽しいし、気持ちよかった」と話す。

<考察>

- ・「汚れるのが嫌」という友達の思いを聞いたことで、周りの子ども達が困っている様子に気づき、みんなで一緒に遊べるプールづくりが始まった。子どもの思いを受け止めたり、アイデアを認めたりしたことで、それぞれが自分の考えを形にし、遊ぶ姿に繋がった。コロナ禍で、ゆっくり話し合いの時間をとったり、友達と触れ合ったり繋がったりする遊びができにくくなっていることもあり、友達とイメージを共有しながら遊ぶにはまだまだ保育者の橋渡しが必要である。今後も友達との思いを繋げ、イメージが共有できるよう、感染対策をしながらの話し合いの在り方を探っていく必要がある。
- ・遊びの中で子ども達がしたいことを受け止め、禁止事項をつくらず見守ってきたことで、きれいなプール、泥んこプールなど、水や泥の性質に気づき存分に感触を味わって遊んだ。また、遊びの中での偶然な出来事が、水の温度の違いなど体験を通して感じることができ、遊びのイメージを膨らませ遊びが広がっていったように思う。

【事例3 4歳児・5歳児 「サッカーを楽しもう」 10月・12月・1月】

- <ねらい> ○ ボールに触れて体を動かすことで、ボールを使って遊ぶことに親しむ。
○ コーチや友達と一緒に、ルールを守りながら、サッカー遊びを楽しむ。

・地域の方にコーチとして来ていただき、体の動かし方、ボールの遊び方など体を動かす楽しさを教えてもらっている。コロナ禍で、家庭でもなかなか外で遊ぶことができにくかったり、思いっきりボールを蹴ったりすることのできる環境が少なくなっているからか、楽しみにしている子ども達の様子がある。感染拡大防止対策のため、2学期からの開始となる。

- ・4歳児——初めての参加で子ども達は楽しみにしていた。自分なりに友達と体を動かすことを楽しみ、走ったり、ボールに親しんだりしながら子ども達なりにボールを蹴ることを楽しんでいる姿が見られた。コーチの話を聞いて、体を動かして遊ぶことを楽しんでいるが、試合となるとルールが分かりにくく、試合で手を使う姿も見られる。ボールを見て、蹴ることでシュートが入るようになると楽しんでとりくんでいた。
- ・5歳児——今年度は自分のボールを使って行った。笛の合図やコーチの話を聞いて、積極的に取り組んでいる姿が見られた。普段の遊びからサッカーを楽しんでいる。活動前から試合を楽しみにする声が聞かれ、期待をもって参加している。毎回の積み重ねからコーチの指示も集中して聞いている。試合中、友達と声を掛け合う姿や自分たちで話し合いを進め作戦を立てるなど、チームで協力する姿も見られた。

<考察>

- ・準備体操の中で、バランスをとるポーズや手足を使う動き、クラスのみんで思いっきり

走るなど、体を使った様々な動きを楽しくできるようなプログラムだったので、体を動かすことの楽しさを味わうことができた。今後のからだ作りや、運動遊びに向けても、「ボールに触れて遊ぶことを楽しいと感じる」ことは必要であり、日々の活動の中でも積極的に取り入れていく必要がある。

- ・年長児は、昨年度の経験を生かして、試合にも積極的に取り組みながらサッカーの技術を習得していった。コーチの丁寧な指導の下、サッカーを楽しむ気持ちと共に友だちと一緒にする楽しさが活動への意欲に繋がったと考えられる。
- ・普段の遊びの中でもサッカーに親しんで取り組み、年長児がする姿に憧れて年少児も自然に中に入って活動する姿が見られ異年齢の関わりをもつことができた。
- ・年少児は、楽しんで参加することでだんだんとルールも分かってきた。コーチの話をよく聞くなどコーチにも親しみをもって接するようになっていった。
- ・今年度は感染対策のため、クラスごとに活動し、時間も短くした。来年度以降、活動時間や内容についても検討が必要である。

5. 研究の成果

- 幼稚園が安心できる環境であることで、子ども達は自分の思いを素直に表現することができ、友達やものと主体的に関わっていくものと考えている。
- 一人一人の興味や関心を捉え、保育者が子どもの思いに共感しながら意図をもって、必要な環境を準備したり、一緒に用意したりしたことで「やってみたい」「つぎはこうしよう」という気持ちが高まり、主体的に遊ぶ姿へとつながっていく。そのために保育者は、発達段階を捉え、子どもの姿から興味や関心はどこに向いているのか、何を楽しんだり、おもしろいと感じたりしているのかを見取り、思いに寄り添いながら、必要に応じてヒントや認める声かけ、見守るなど、その年齢や場面、ねらいにそった保育者の援助が大切であると感じた。
- 4歳児は5歳児の生活や遊びの様子に刺激を受け、興味関心を広げたり、同じようにやってみようと挑戦したりする姿につながり、5歳児は、遊びの中で経験したことを4歳児に教えてあげようと自信をもち自分達で意欲的に遊びを進める姿があり、お互いが刺激し合い夢中になって遊ぶ姿に異年齢の関わりも大切であると再確認した。
- 地域の方との交流で、普段とは違う経験も積み重ねることができ、自ら取り組もうとする姿にもつながった。

6. 今後の課題

- 今後も一人一人の興味関心を探りながら、子どもが心を動かし「もっとやってみたい」と感じ、自ら考え遊びを生み出す子どもの姿を目指し、今後も子どもが主体的に関わりたくなる環境構成や保育者の援助の在り方を探っていきたい。